心温かい人々が暮らす町 にぎやかそ 美波町

人権教育・啓発コーナー（このコーナーでは人権に対する思いを掲載していきます。）

「言葉について」

言葉遣いは、心遣いだと思う。でもなかなか思うようにはいかない。

人間は、言葉によって救われたり、言葉によって傷つけられたりする。

言葉や文化の違いを認めながら共に生きていく。そんなことが出来ればいいのだろうが、なかなか気持ちを表現したり思いを伝えたりするために使う言葉の表現は難しい。もちろん表情や態度も重要である。

最近、阿波弁が解る人が少なくなってきた。

テレビやラジオからも標準語と言われる言葉で放送されている。

地方によって、同じ言葉でもアクセントやイントネーション（抑揚）、ニュワンス（音の調子）の違いで違和感を覚えることがある。

例えば、阿波弁で「しわしわ」という言葉がある。

標準語で「しわしわ」というと「紙がしわしわだ」とか「顔がしわしわだ」とかで使われるが、阿波弁の意味は、「ゆっくり」となる。

阿波弁には、「いんでくる」とか「あるでないで」という「行くのか来るのか」「あるのかないのか」わからない言葉がある。この言葉は、先に来る言葉が「伝えたい言葉」であるが、県外から来た人は、「いんでくる」と言ったので「帰ってからまた来る」と思って待っていたとか、「あるのやらないのやら」わからないと言われることがある。

他には、「いける」は、「どこかへ行く」ではなく「大丈夫ですか」という意味で使われる。怪我をしている人に「いけるけ」と言ったら「こんなに怪我しているのに何処へ行くのよ」と言われたりする。

「かっといて」は、「買っておいて」ではなく、「借りておいて」、なのに買われていたり

「えらい」は「賢い」でなく「体が疲れた」という意味で使われるが、「自分で賢い」と言ったと思われたりする。

「せこい」は「苦しい」の意味で使うが、大阪では、「お金にセコイ」という使い方で「ケチ」のように使われたりする。

「たっといて」は、「立ちっていて」ではなく「戸を閉めて」、ということなのに勘違いされる。

「まがる」は、「カーブする」ではなく「邪魔になる」、他にもたくさんこんな言葉はあるかもしれない。

関東と関西では、「橋」「箸」「端」とかイントネーションの違いで間違いが起こることもある。

このように、言葉は、「話す」だけで伝わらないことがある。でも文章にしても、思い込みや無知などで伝わらないこともある。人間同士わかりあえるためにコミュニケーションが大切だとよく言われるが、コミュニケーションが苦手な人も世の中にはたくさんいる。苦手な人を無理やり仲間に入れるのではなく、苦手という個性があるということも受け入れて認め合えることが大事だ。

人間は、一人ひとり体の大きさや顔や色等の外見だけでなく能力や感性、理解度、育った環境や文化や宗教観等違う事がある、「違って当たり前」なのだ。言葉は、「言霊」と言われることがある。言葉に魂が宿ると言われ、人の嫌がることを話した言葉や落書きのように書いて表現したことで不快と感じた人が居れば、元には戻らない。だから言葉は、人を傷つける刃物にもなることを理解し、相手への思いやりを忘れず書き話さなくてはならない。質問するときは、鋭い刃先を鈍らせ言葉を選び話してみようと思う。

人は、自分が使っている言葉でできている。

「心温かい人々が暮らす、賑やかな過疎の町」美波町であり続けるために人権について考え守っていくことがまさに、“にぎやかそ”美波町づくりにつながります。このコーナーでは人権に対する思いを掲載していきます。